

BCS

PRIZE-WINNING WORKS

BCS賞受賞作品探訪記

23

第三〇回受賞作品（一九八九年）

播磨屋本店円山店 前編

一九八八年四月、兵庫県朝来市生野町にとっとりとした茅葺き屋根の民家が立ち上がった。おかし煎餅の製造・直販を手掛ける播磨屋本店の店舗として新設されたもので、以来、来訪者を魅了し続けてきた。前編は「現代の民家」がつくられた経緯を紹介する。

主屋の東側。どっしりとした寄棟造りの茅葺き屋根。軒が低く抑えられ、落ち着いた雰囲気をもたらしている。26年を経て、時間と共に自然に馴染んでいる様子に目を奪われる。

※播磨屋本店円山店は、現在の播磨屋本店生野総本店です。

真のやすらぎを提供する場として店舗を立ち上げる

兵庫県姫路市から北上して日本海へ抜けるルートのほぼ中間に、朝来市生野の山里が広がっている。古くから生野銀山が有名で、戦国時代から近現代まで、時の政権が直轄によって財政基盤を担い、地元にも経済、文化にわたる豊かさをもたらしていた。現在もその名残りは静かな町中の暮らしや、人々の心の中に生きている。二六年前、そのような背景をも

つ山里に、大きな寄棟の茅葺き屋根を頂く民家が新築された。建築主は生野を拠点とするおかし煎餅の製造販売会社・播磨屋本店の阿野拓夫社長である。同社が急成長をはじめた時期で、事業の核となる店舗を新たに構えることにしたのだ。民家にした理由を阿野社長が語る。「単に物販のために風情を演出するのではなくて、日本人の心のふるさとをつくりたかった。都会の生活者に一時でもふるさとへ帰ったような気持ちを味わってもらえる場所をつくり、深

い意味でのやすらぎを提供したいと思ったんです」。一九八七年四月、数社の建設会社に設計条件などを記した書面を送り、提案を求めた。内容によって依頼先を決定する設計コンペのかたちである。その結果、阿野社長の気持ちをつかんだのは竹中工務店だった。

民家の魅力をじっくり味わえるアプローチ計画

このプロジェクトに携わった竹中工務店の設計チームは十一名。当時、入社二年目だった野田隆史氏が振り返る。「チームリーダーが、これは一生に一度あるかないかの仕事だと言って、全員が全力をあげて取り組みました」。とはいえ、提案期間は異例の短さで一カ月に満たなかった。四月二十一日に筆書きの依頼書が設計部に届き、最終提案日は五月十五日。すぐに敷地を視察し、検討をスタートさせた。敷地面積は約三、六〇〇平方メートル。南北に長い形状で、北側に国道三一二号が走り、東側は豊かな山の樹木と清冽な川に面している。早くも設計チームは、九

日後の四月三十日に中間報告として五つのプラン（平面計画案）を提示し、方向性を阿野社長に諮った。阿野社長が抱いていた基本的なイメージは、お客様を招き入れる場を「舞台」、バックヤードを「楽屋裏」に見立てるというものだった。「プランを検討するうえで鍵となるのは、舞台にあたる主屋と、楽屋裏にあたる離れを敷地の中にどのように配置し、つながりで、すぐにいくつかのパターンをつくっていきました」と野田氏。プラン候補は、主屋の形状はそれぞれ異なるが、アプローチの仕方によって二つに大別される。まず北から



駐車場から正門まで、季節の野の花が咲く小道が設けられている。背後に山を借景した主屋の姿を眺めながら歩いていく。



東側外観。主屋と離れが廊下でつながれている。敷地は1級河川・円山川の源流と、釜床山が迫るロケーション。



主屋の窓から軒先まで約4mの深さ。茅葺きの茅はススキが、屋根を支えるタルキには耐久性の高いヒノキが使われている。

志向でつくりたいという方針があった。日本人が古くから自然と共に生し、育んできた材料や工法を使うことが基本的なスタンスだった。一方で竹中工務店は民家の単なる再現に終わらせず、現代の魅力を取り入れることを提案し、阿野社主もそれを了解した。たとえば、主屋が川と庭に面する西側の開口は、柱を一〇斜飛ばして思い切り開放した。室内から深い軒内を通して、庭のたたずまいを存分に味わい、ゆったりとした時間の流れに身をゆだねることができる。離れの和室も出隅の柱を抜くことで、

大きな開放感をもたらした。茅葺き屋根の頂部を覆う棟瓦は、装飾をつけずにシンプルなデザインで特注した。圧倒的な屋根の迫力の中なかにさりげなく現代を表現している。主屋の引戸を開けると、漂っている煙の匂いなぜか懐かしい。訪れる人の年齢はさまざま。リピーターも多く、外国人を案内してくる方もいるという。博物館などの静かな展示とは異なり、播磨屋本店円山店は自然に溶け込んで生き続ける民家のありようを伝えてくれる。



主屋の内部。田舎裏が設けられており、昔の日本の暮らしに想いを馳せる場になっている。現在は平日に喫茶、休日にレストランとして営業している。

南に向かって主屋と離れを配置し、北側の駐車場から短いアプローチで主屋へ至るタイプである。五つのプランのうち四つはこのタイプで、距離の差はあるが、車を降りてすぐに主屋へたどり着く点が共通している。残る一つは、駐車場からのアプローチを敷地の南端まで伸ばし、主屋を南に配置する。

現代のデザインを反映した民家

阿野社主には、できるだけ本物

建物の前を通ってから回り込むようにして主屋に入るタイプだ。阿野社主はすぐにそのプランを選んだ。「直感的にこれしかないと思いました。ロケーションが生きて昔の農村の原風景を髣髴とさせる。それに私は花に思い入れがあつて、土塀に沿って季節の野の花を楽しみながら、徐々に主屋に近づいていくという計画がよかった」と阿野社主。設計チームは、プレゼンにあたって特定の案を推すことはしなかったが、実は、阿野社主が選んだプランに自信をもっていたと野田氏は言う。双方の意識が一致したこと、設計チームの意気込みはさらに高まり、最終案へとまとまっていった。

アプローチを歩くと、土塀の向こうに、山を借景した主屋の茅葺き屋根が現れる。雄大な姿が目に入るが、まだ全ては見通せない。その趣がこれから向かう場所への期待を高めているのがわかる。

建築主より

人に喜んでもらうのが一番嬉しい
それが明日への活力になります



株式会社播磨屋本店代表取締役
阿野拓夫 Takuo Aino

子どもの頃からものづくりが好きで、大きいものをつくりたい気持ちから、大学で造船を学びました。基本がエンジニア肌というか、建築には親近感があります。父が興した小規模な製菓会社を継ぎ、事業が軌道に乗り始めたのは、私が三〇代後半で、当時から何事もスピード感を第一にしてみました。設計コンペで、とにかく驚いたのは竹中工務店の気合いの入りの方でした。設計案をいくつも出してきて、最終案はパネルや模型をつくり込み、力を込めたプレゼンで

した。どうしてこんなに一生懸命なのか不思議に思いました。きっと、本気で民家をつくりたいという私の気持ちが彼らに伝わったのでしょう。オープンは一八八年四月と決めていたので、設計も施工も短期間で、ものすごいプレッシャーがかかっていたと思います。竹中の施工担当だった森田隆さんはまだ若く、職人さんたちと付き合いながら、苦労していました。木工事は竹中工務店の監督のもと、地元工務店が行いましたが、めったにない本式の工事だったので、そのときの親方はあの工事が一番楽しかったといまだに言ってくれます。本当に感動すると人は無口になるもので、お店に来てくれるお客様様の顔を見ると、感動していただいているのがわかります。若い人たちが静かに目を輝かせている姿もあつて、なにより嬉しく思っています。

設計者より

着工までの三カ月半、すべてを
勉強しながら設計に打ち込みました

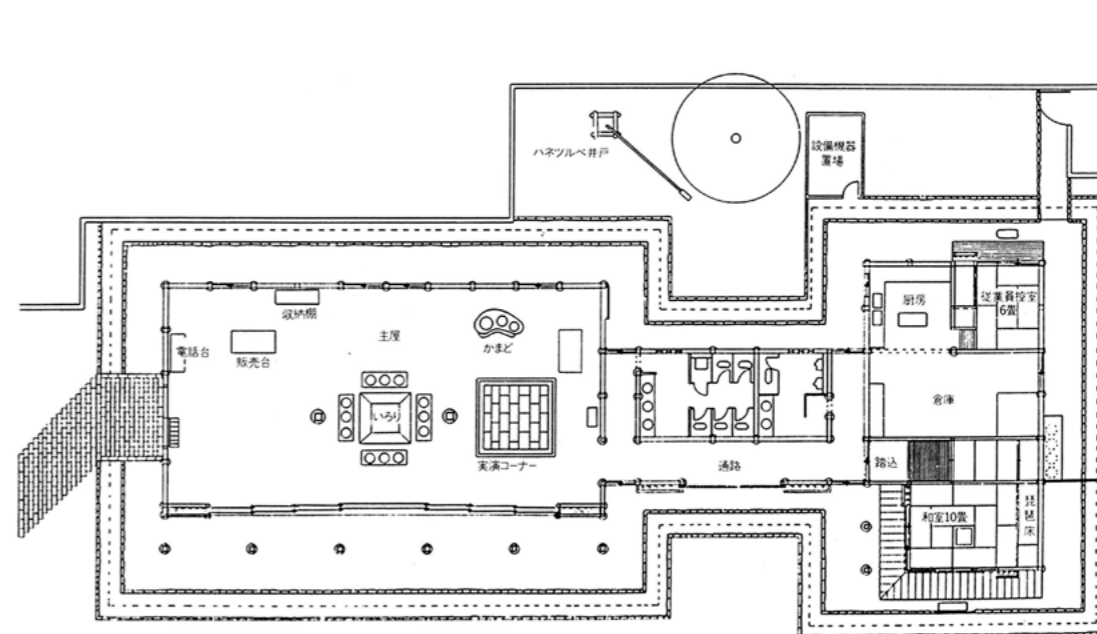


株式会社竹中工務店 大阪本店設計部
設計第1部門 設計グループ長
野田隆史 Takahiro Noda

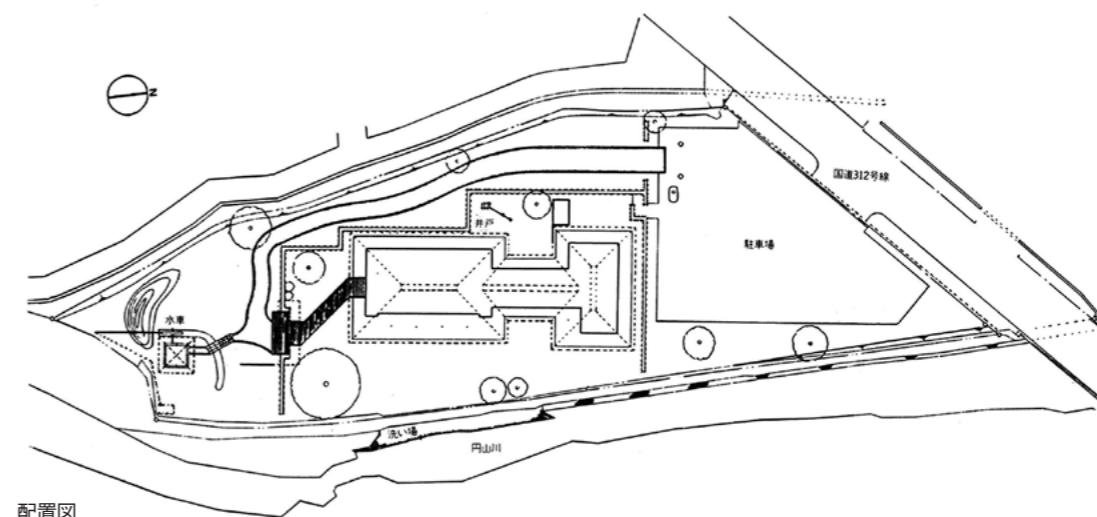
に話を聞きました。そして、茅を扱い、葺いている技術者や会社を紹介してもらったり、カマドをつくれる左官職人さんがどこにいるかなどを教えてくださいました。紹介してもらった専門家や職人のところへ行ってヒアリングを重ね、情報を織り込みながら設計図をつくりました。

コンペで竹中工務店を指名していただいたから、すぐに実施設計に入りしました。しかし、当社に技術の蓄積があるといっても、茅葺き屋根の民家となると、社内に経験や知識をもつ者はいませんでした。図面を描くにも、わからないことだらけです。そこで、いたるところへ出かけて行ってヒアリングすることから始めました。兵庫県豊中市にある「日本民家集落博物館」は各地の民家を野外に展示していますが、そこで学芸員さん

意外に大変だったのは水車の設計です。阿野社主がお考えの水車小屋は飾りではなくて、実際に動いて精米に使えるものでした。茅葺きよりも情報がなくて、コンペ時はどこへ行けば本物が見られるのかもわかりませんでした。なんとか解決できましたが、最後まで不安で、オープン直前に無事に動き出したのを見たときには本当に感動しました。この仕事から得た経験、ノウハウは大きく、その後、私たちの伝統的な建築の仕事の幅を広げるものとなりました。



平面図



配置図

播磨屋本店円山店

JR播但線生野駅下車。タクシーで約10分。



計画概要

所在地：兵庫県朝来市生野町円山字京田30
 (受賞当時：兵庫県朝来郡生野町円山字京田30-2)
 建築主：株式会社播磨屋本店
 設計者：株式会社竹中工務店
 施工者：株式会社竹中工務店
 竣工：1988年3月
 敷地面積：3,586㎡
 建築面積：522㎡
 延床面積：319㎡
 構造：木造
 規模：地上1階

※店名は受賞当時のもの